



CELLO

堀江牧生 & 乾将万

PIANO

公益財団法人
青山音楽財団助成公演

10 Sonatas

47都道府県、踏破への道

PROGRAM

- L.v.ベートーヴェン/チェロ・ソナタ第2番 op.5-2 ト短調
チェロ・ソナタ第3番 op.69 イ長調
- F.シューベルト/アルペジオーネ・ソナタ D.821 イ短調
- J.ブラームス/チェロ・ソナタ第1番 op.38 ホ短調
チェロ・ソナタ第2番 op.99 ヘ長調
- C.ドビュッシー/チェロ・ソナタ ニ短調
- F.プーランク/チェロ・ソナタ FP.143
- S.プロコフィエフ/チェロ・ソナタ op.119 ハ長調
- D.ショスタコーヴィッチ/チェロ・ソナタ op.40 ニ短調
- N.カプースチン/チェロ・ソナタ第2番 op.84

出演/堀江牧生、乾将万

2026. 10.17 (土) [14:30 開演] (開場 14:00)

入場料 **2,500 円** [全席自由] ※当日券 500 円増

お問い合わせ・チケット購入 ■ INUI MUSIC SALON ☎080-4761-6820

チケット購入 ■ 青山音楽記念館 ☎075-393-0011 (9:30~18:00 月・火休館)

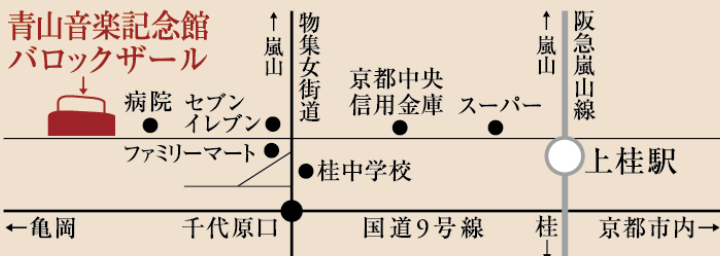


【公式 LINE アカウント】

※出演者・プログラムはやむを得ず変更となる場合があります。※未就学児の入場はご遠慮ください。

※お客様用の駐車場はございません。ご来館の際は公共交通機関をご利用ください。

公式 LINE アカウントへぜひご登録ください！



Barocksaal

京都 青山音楽記念館

阪急電車嵐山線「上桂」駅下車西へ300メートル
ご来場の際は公共交通機関をご利用ください。

お問い合わせ: tel. 075-393-0011 9:30~18:00 月・火休館
〒615-8282 京都市西京区松尾大利町9-1 <https://barocksaal.com/>

「作品との出会い」から「レパートリー」へ

—— 継続的なリサイタルプロジェクトを経た振り返りと、これから目指す“レパートリー形成”

“デュオ・じゅうじん”は、ベートーヴェンのチェロソナタ全曲演奏会や複数回にわたる連続リサイタルなど、本格的なシリーズ企画を次々と実現してきた。2026年に始動する新シリーズに向けて現状を振り返る中で見えてきたのは、“新しいことをやり続ける段階”から、“これまで築いてきたものをさらに深く育てる段階”へと移行する必要性だった。

「次年度の骨子には、これまで取り組んできた大きな企画のエッセンスを一つに統合する性質があります。これまでの積み重ねを、より“質的に深めていく”方向へ進みたいと考えています。」来年度には47都道府県を視野に入れた展開も構想されている。1年で完走することを最優先にするのではなく、多少時間をかけながら取り組むプロジェクトとなる見通しだ。単なるツアー挑戦という面白さに留まらず、同一プログラムを各地で繰り返し演奏することで作品理解を深化させ、演奏の完成度を高めていく重要なプロセスとしても位置付けている。未知の土地で演奏する意義と、同じ作品を積み重ねていく蓄積。その両方が両立する企画でありたい、というのが大きな目標だ。

「弾いた回数」ではなく、「作品を自分たちの血肉にする」ということ

これまで非常に多くの作品に取り組んできたものの、それらすべてが「完成したレパートリー」と呼べる段階にあるわけではないという共通認識がある。「寝ていても弾ける」という意味ではありませんが、“この作品の私達の演奏はこうです”と胸を張って言えるほど、理解や愛情、そして歴史的視野まで含めて本当に積み重なっている曲は、まだ限られていると思っています。だからこそ、同じ曲を繰り返し演奏し、育て続ける時間が必要なのです。」クラシックの名作は増えない。ベートーヴェンのチェロソナタが6曲・7曲へと増えることもない。それでも名作が今日まで価値を保ち続けているのは、歴代の演奏家たちが同じ作品に長い時間をかけて向き合い、その深みを更新し続けてきたからだ。その“歴史に連なる仕事”を、今度は自分たちが担うべき段階に来ているという責任も感じている。

年齢とともに変わるもの

30代半ばから40代へ。心身の変化についての率直な実感も語られる。

「放っておけば身体は確実に衰えます。持久力や反応の速さは自然と落ちていく。その一方で、感覚はより鋭くなり、音楽に対する欲求はむしろ強くなっている実感があります。」

だからこそ、テクニカルにも総合的にも高い要求を持つ作品に、“今”真剣に取り組む意義がある。

ブラームス第2番やラフマニノフの作品は、内容の濃密さだけでなく技術的課題も非常に大きい。集中した時間を長期的に確保しなければ、本当の意味で手に取めることのできない作品だ。一方で、作品の中には年齢や経験の蓄積によって自然に熟成されていく側面をもつものもある。すべての作品に同じ姿勢で臨むのではなく、「今しか深められない作品」と「時間とともに育てていく作品」を見極めることが重要だと考えている。

「企画の新規性」よりも、「同じ曲を弾き続ける努力」

音楽は、一度聴いたら終わりというものではない。同じ曲でも、演奏者・聴き手の人生や価値観が変われば、そのたびにまったく異なる姿を見せる。実際、演奏するたびに新しい発見や感触が生まれている。もちろん、聴衆から見れば「同じプログラム」に映ることもあるだろう。しかし演奏家は同じ曲を何度も演奏し、今まで見えていなかった景色を追い求めていくものだ。だからこそ、“同じ曲を弾き続ける”という一見地味な積み重ねこそが、最も本質的な営みなのだと考えている。

「楽しい」と信じられる道だけを進む

47都道府県ツアー、継続公演シリーズ、そしてYouTubeをはじめとする発信活動。多くの可能性を含んでいるが、それらは義務としてではなく、自分たちが本当に価値を感じている取り組みとして位置付けている。「他人の期待や流行ではなく、自分たち自身が楽しいと感じ、誇りを持つことを続けたい。それが結果として聴衆の皆さんに届くなら、それが一番幸せだと思います。」派手な進化より、静かな深化を。そして、音楽と真正面から向き合い続ける時間を、これからも積み重ねていく。



堀江牧生（ほりえ まきお） | チェリスト

1990年、大阪府吹田市生まれ。3歳よりチェロを始める。東京音楽大学付属高等学校を経て東京音楽大学を卒業。ロシア・モスクワ音楽院に留学し、ナターリア・シャホフスカヤに師事、同院を卒業。その後ウィーン国立音楽大学を経て、国際的な研鑽を積む。札幌ジュニアチェロコンクール優秀賞・山藤賞、スロヴァキア国際チェロフェスティバル第1位、松方ホール音楽賞、青山音楽賞新人賞、ピバホールチェロコンクール第2位、横浜国際音楽コンクール第1位など受賞多数。2016年にはモスクワで開催された「プロコフィエフに捧げる」国際チェロコンクールでグランプリを受賞。ローム・ミュージック・ファンデーション、ヤマハ音楽振興会の奨学生としても活動した。ロシア国立ポリショイ劇場管弦楽団をはじめ、関西フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、キーロフ管弦楽団など国内外のオーケストラと共演。現在はソロや室内楽での演奏に加え、「堀江トリオ」など自主企画コンサートも精力的に展開し、後進の指導にもあたっている。ロシア、リベックで自作のチェロ協奏曲を初演した事を皮切りに作曲家としても活動を展開し、京都金戒光明寺での1時間に渡るバレエ作品の音楽を2台チェロのための組曲として全て作曲、好評を博し再演も決定している他、指揮者としてもロシア、日本でキャリアを積み音楽全体への造形の深さにも定評がある。近年はピアニスト乾将万と4年以上にわたり共演を重ね、ベートーヴェンチェロソナタ全5曲をはじめ、ブリテン、プーランク、ドビュッシー、ラフマニノフ、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチなど多岐にわたるレパートリーを蓄積。会場や聴衆に合わせた柔軟なプログラム構成に定評がある。



乾 将万（いぬい まさかず） | ピアニスト・音楽プロデューサー・教育者

1991年、大阪府茨木市生まれ。大阪音楽大学器楽学科ピアノ専攻を首席で卒業後、同大学大学院を修了。ハンガリー政府給付奨学金「Stipendium Hungaricum」を受給し、ハンガリー国立リスト音楽院（リスト・フェレンツ音楽大学）に留学。2018年、完全帰国。現在は、INUI MUSIC SALON代表として、音楽祭をはじめとする各種コンサートの企画・主催、映像制作、CD録音、ピアノ指導など、音楽を軸とした多彩な活動を展開。加えて、大阪子ども専門学校非常勤講師、大阪音楽大学演奏員として教育分野にも力を注いでいる。年間50公演を超える演奏活動を行う一方、大阪府および各自治体の文化事業においては、専門人材・学識者としての役割も担う。